

キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究

著者	青木 康太朗, 粥川 道子, 杉岡 品子
雑誌名	北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
巻	3
ページ	27-39
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000210/

キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に 及ぼす効果に関する研究

Study on Bringing up Social Basic Ability of University Student in Camp

青 木 康 太 朗	粥 川 道 子
Kotaro AOKI	Michiko KAYUKAWA
杉 岡 品 子	
Shinako SUGIOKA	

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
第 3 号 2012

キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に 及ぼす効果に関する研究

Study on Bringing up Social Basic Ability of University Student in Camp

青 木 康 太 朗¹⁾

Kotaro AOKI

杉 岡 品 子¹⁾

Shinako SUGIOKA

粥 川 道 子¹⁾

Michiko KAYUKAWA

I. 緒 言

平成20年7月に閣議決定された「教育振興基本計画」¹⁾では、今後の教育施策の基本的方向のひとつとして「教養と専門性を備えた知性豊かな人間を養成し、社会の発展を支える」を掲げ、大学教育における教育力の強化と質保証、卓越した教育研究拠点の形成と国際化の推進等の施策を示した。さらに、同基本計画では、平成20年からの5年間を高等教育の転換と革新に向けた始動期間と位置づけ、中長期的な高等教育の在り方について検討し、結論を得るとした。これを受け、文部科学大臣から中央教育審議会に諮問された「中長期的な大学教育の在り方について（諮問）」²⁾では、社会構造全体が大きな変革期を迎えるなか、大学教育に対する期待と要請は極めて大きくかつ多様になっていると指摘したうえで、進学率の向上と学生のニーズの多様化、18歳人口の減少といった状況に伴った大学教育全体の見直しについて言及し、社会や学生からの多様なニーズに対応する大学制度やその教育の在り方などについて検討す

るよう求められた。

現在、我が国の大学・短大への進学率は59.4%³⁾と、青年の約6割が大学に進学している状況にある。このような状況を鑑みると、大学教育は社会に出るための最終的な教育の場となりつつあり、社会や企業等に対する責務も年々重みを増している状況にあると言える。そのため、社会や経済等の発展に寄与できる豊かな教養と深い専門性を身につけた人材をいかに育成するのかということは、我が国の大学教育にとって大きな課題となっている。しかし、近年の青年においては、基礎学力だけではなくコミュニケーション能力や問題解決力等の低下等により、企業や社会が求めている水準に満たない学生が目立つようになり、多くの企業において採用のミスマッチや入社後の教育に頭を悩ませているのが現状である⁴⁾。

大学教育で育成する人材の能力については、学士課程教育共通の学習成果として文部科学省が提示した「学士力」をはじめ、教育や労働など多様な視点から検討されている。その中の一つに、産業界から求められている

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

能力として、経済産業省が提起する「社会人基礎力」がある。社会人基礎力とは、前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の3つの能力（12の能力要素）で構成されており（図1）、「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事する上で必要な基礎的な能力」と定義されている⁵⁾。このような能力は、従来、大人への成長の過程において自然に身に付くもので、社会に出れば自然に鍛えられるものと考えられてきたが、青少年を取り巻く今日の社会環境の変化によって、社会に出る前に社会人基礎力を身に付ける機会が減少していると言われている⁶⁾。さらに、長引く不況による教育研修費の削減や雇用形態の変容等によって、企業側も人材育成に対する余力がなくなってきており、社会人に求められる最低限の能力を大学で育成することが期待されるようになった⁷⁾。

このように大学に対して社会人基礎力育成

の期待が高まるなか、「社会人基礎力に関する研究会」の座長を務めた諏訪は、大学教育における社会人基礎力の育成について「学生が能動的に参加できるような問題解決能力養成型の実習タイプの授業を増やすことが重要」と指摘している⁶⁾。また、社団法人日本経済団体連合会が596企業を対象に行ったアンケート調査⁸⁾によると、学生を採用する企業の立場から大学教育に期待するものとして多かった回答は「論理的思考力や課題解決能力を身につけさせる」や「チームを組んで特定の課題に取り組む経験をさせる」などであり、今後の大学教育改革において取り組みを強化して欲しいと思うものとして多かった回答は「教育方法の改善(双方向型、学生参加型、体験活動を含む多様な授業の実施等)」であった。高等教育機関である大学において、幅広い教養や専攻する学問の深い知識を教授するためには受動的な学習形態（講義形式など）も必要であるが、今後、物事を論理的に考察



図1 社会人基礎力の構成

※経済産業省ホームページより引用

し、体系化する力を持つ人材を育成していくためには、今あるカリキュラムや授業をうまく活用し、PBL（Project Based Learning：課題解決型学習）や実践型インターンシップといった能動的な学習形態を積極的に取り入れていくことが大切だと言える。経済産業省は、2008年より大学での授業・活動を通じて学生の社会人基礎力の成長を競う「社会人基礎力育成グランプリ」を開催し、大学教育における社会人基礎力育成の推進を図っている。その中で、各大学は産学連携など様々な試行的取組を展開し、社会人基礎力育成に力を入れているが、筆者は社会人基礎力を育成する能動的学習の一つとして、体験学習法をベースとしたキャンプ体験が有効な手段となるのではないかと考えている。

大学教育におけるキャンプ体験の有効性については、自己概念や自己効力感、社会的スキル、生きる力の向上など、先行研究によって様々な教育効果が明らかにされている。キャンプ体験と社会人基礎力の関係については、築山らが3泊4日のキャンプ実習に参加した大学生を対象に行った研究⁹⁾が挙げられるが、測定尺度の問題や研究手法等の課題により、当該研究では明確な成果を示すには至らなかった。しかしながら、社会的スキルや生きる力といった社会人基礎力を構成する能力と関連する能力については先行研究において教育効果が明らかにされていることから、キャンプ体験によって社会人基礎力が向上する可能性は十分にある。

大学教育に対する社会人基礎力育成の期待が高まるなか、その育成手段の一つとしてキャンプ体験の有効性を検証し、明らかにすることは、今後の大学教育における教育力の

強化や質の向上の一助になると考える。

Ⅱ. 研究目的

本研究は、社会人基礎力を育成する能動的学習の一つとしてキャンプ体験に着目し、キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果について検証することを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

本研究では、北翔大学の平成22年度「野外教育実習」に参加した114名の履修生を調査対象とした。そのうち、分析対象者は、全プログラムに参加した学生の中からデータの欠損がなかったもの限定した結果、105名（有効回答率：92.1%）となった。なお、分析対象者の性別の内訳は、男子73名、女子32名であった。

2. 「野外教育実習」の概要

(1) 実習のねらいと目的

本実習は、キャンプ生活をベースに様々な野外活動に挑戦することを通じて、保健体育科教諭の養成を行うだけではなく、社会人に求められる基礎的な資質・能力の向上にも取り組むことをねらいとしていた。なお、本実習の実施に当たっては、以下の3つを実習の目的として設定し、参加者に周知した。

- ① さまざまな活動や課題にグループで挑戦することで、グループにおける自分の役割を発見する力や使命感、責任感を養うとと

もに、社会性やコミュニケーション能力の育成や自ら主体的・積極的に行動する態度や意識をはぐくむ。

- ② 野外活動を通じて自然の素晴らしさや大切さに対する気づきを促し、環境保全意識の向上を図る。
- ③ 野外活動に関する基礎的な知識や技術を習得させる。

(2) プログラムと指導

本実習の実施期間は3泊4日で、主なプログラムは表1に示したとおりである。なお、履修生の人数の都合上、114名の履修生を前半（平成22年8月24日～27日）、後半（8月28日～31日）に分け、表1に示したプログラムをそれぞれ実施した。

実習期間中はすべてテント泊で、食事の大半は野外炊事となっている。本実習のメインプログラムは、2日のASE（Action Socialization Experience）と3日目の北日高岳登山となっていた。これらの活動を通じて様々な問題や課題に仲間と挑むことで、グループにおける自分の役割を発見する力や使命感、責任感、自ら主体的・積極的に行動する態度や意識を養い、社会性や

コミュニケーション能力を育成することで、徐々にグループの凝集性を高め、仲間とともに一つのことをやり遂げる喜びや達成感を味わわせることをねらいとしている。なお、実習期間中は、毎晩、ふりかえりの時間が設けられており、その日に感じたことや気づいたことを意識化させるとともに、グループ内で気づきを共有するよう指導を行った。

班編成は、部活動や所属ゼミ、出身校が異なるように配慮し、1班7～8人の男女混合班とした。各班にはトレーニングを受けた上級学生がグループカウンセラーとして配置され、各活動や生活場面において、本実習の目的が達成されるよう適宜必要な指導を行った。

3. 調査期間及び方法

調査期間は平成22年8月24日～10月1日とし、調査方法は自記式の質問紙を用いた集合法で行った。測定時期は、事前（実習初日）、事後（実習最終日）、1カ月後の計3回とした。

表1 主なプログラムの流れ

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目
午前	集合・大学出発 自然の家到着	朝のつどい 朝食（サンドウィッチ） ASE① ・ヒューマンチェア ・日本列島 等	朝のつどい 朝食（焼き鮭） 北日高岳登山	朝のつどい 朝食（パン） テント等の撤収 清掃 マインドクロッキー
午後	開講式・オリエンテーション アイスブレイキング ビーイング テント等の設営 夕食（カレーライス）	昼食（おにぎり） ASE② ・ワイルドウーザー ・ヒッコリージャンプ ・くもの巣 など 夕食（すいとん）	昼食（おにぎり） 北日高岳登山 温泉 夕食コンテスト	グループでのまとめ 昼食（弁当） 閉講式 自然の家出発 大学到着・解散
夜間	ふりかえり	ふりかえり	ふりかえり	

4. 調査内容

本研究では、参加者の特性の把握と教育効果の検証するため以下の調査内容を設定した。

(1) 参加者の特性

① 過去に経験したことがある自然体験

参加者の自然体験に関する状況を把握するため、青少年教育研究会¹⁰⁾が行った「子どもの体験活動等に関するアンケート調査報告書」の自然体験の9項目を用いて、過去に経験したことがある自然体験に関する設問を設けた。各項目は「何度もある」、「少しある」、「ほとんどない」の3件法で回答を得ることとし、測定は事前調査で実施した。

② 教員養成課程の履修の有無と実習を履修した理由

参加者の履修の動機を把握するため、教員養成課程の履修の有無については「はい」又は「いいえ」の2件法で尋ね、実習を履修した動機については自由記述で具体的な理由について回答を求めた。

(2) 教育効果の検証

① 社会人基礎力の測定

社会人基礎力の測定には、浅井ら¹¹⁾が作成した「社会人基礎力尺度」を採用した。この尺度は、経済産業省がまとめた「社会人基礎力」の構成に基づき、前に踏み出す力(アクション)として「主体性(3項目)」、「働きかけ力(4項目)」、「実行力(6項目)」、考え抜く力(シンキング)として「課題発見力(2項目)」、「計画力(4項目)」、「創造力(6項目)」、チームで働く力(チームワーク)として「発信力(2項目)」、「傾聴力(8項目)」、「柔軟性(2項目)」、「状

況把握力(5項目)」、「規律性(4項目)」、「ストレスコントロール(3項目)」の計12因子49項目で構成されている。各項目の回答方法は、「あてはまる」、「少しあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の4件法とした。なお、社会人基礎力の測定は、事前、事後、1カ月後の計3回実施した。

② 実習で学んだこと、気づいたことの有無と内容

本実習の具体的な教育効果を把握するため、事後調査で「あなたは、『野外教育実習』の活動を通して学んだこと・気づいたことがありますか」との設問を設け、回答方法は「はい」又は「いいえ」の2件法とした。さらに、「はい」と回答した者に対しては、「どのような活動を通して、どういったことを学んだのか・気がついたのか」と尋ね、具体的な成果を得ることとした。

③ 実習の経験を生かして実践したことの有無と内容

本実習における教育効果の日常への般化を把握するため、1ヶ月後の調査において「あなたは、『野外教育実習』で学んだことを生かして、日常生活で何か実践したことがありますか」の設問を設け、回答方法は「はい」又は「いいえ」の2件法とした。さらに、「はい」と回答した者に対しては、「どのようなことを学び、実際にどのようなことをしたのか」と尋ね、具体的な成果を得ることとした。

5. 分析方法

社会人基礎力の向上効果を明らかにするため、まず各項目の回答を「あてはまる」=4点、

「少しあてはまる」＝3点,「あまりあてはまらない」＝2点,「あてはまらない」＝1点と得点化し,各因子を構成する項目の得点を合算することで,因子ごとに合計得点を算出した。その後,各測定段階で因子ごとに合計得点の平均(M)及び標準偏差(SD)を算出し,各因子の合計得点を従属変数,測定段階を要因とした一要因分散分析(sA-Type Design)を行った。なお,測定段階の単純主効果に有意差が認められた場合,後の分析として多重比較(bonferroni: 5%水準)を行った。

その他の質問項目については,単純集計で回答の割合を算出した。

統計処理は,SPSS statistics 19を用いて行った。

IV. 結果と考察

(1) 参加者の特性

① 過去に経験したことのある自然体験

参加者が過去に経験したことがある自然

体験をみると(図2),最も経験が多かったのは「海や川で泳いだこと」(72.4%)で,次いで「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」(70.5%),「チョウやトンボ,バッタなどの昆虫をつかまえたこと」(69.5%)であった。

そこで,「キャンプをしたこと」をみると,半数以上の参加者が「何度もある」と回答していた。国立青少年教育振興機構が行った「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査 平成22年度調査」の結果¹²⁾では,「何度もある」と答えた青少年(小学4～6年生,中学2年生,高校2年生)は約2割であった。年齢の違いがあるため単純に比較することができないが,本実習の参加者は比較的キャンプ経験のある学生が多いのではないかと推察される。

② 教員養成課程の履修の有無と実習を履修した理由

本実習の参加者のうち,教員養成課程を履修している学生は66%であった(図3)。

教員養成課程の履修の有無ごとに本実習

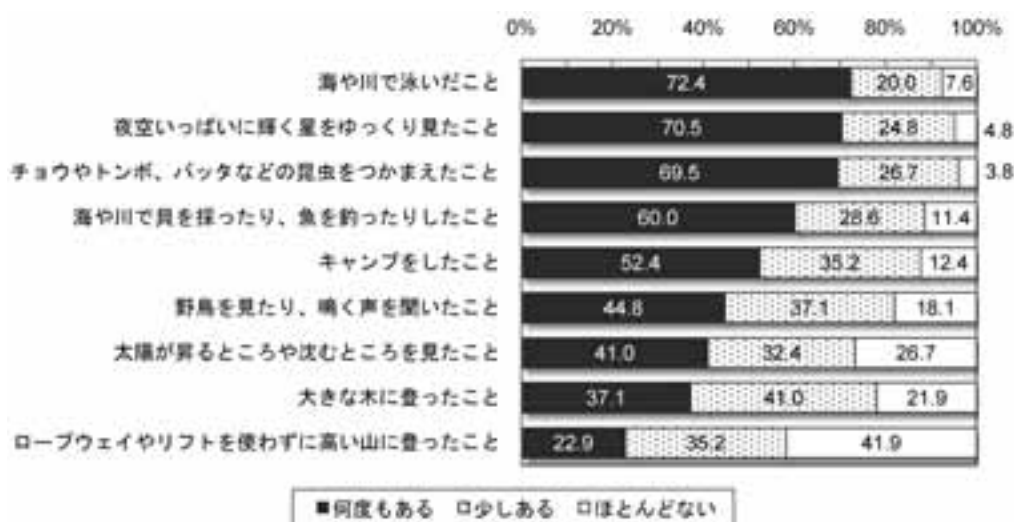


図2 過去に経験したことのある自然体験

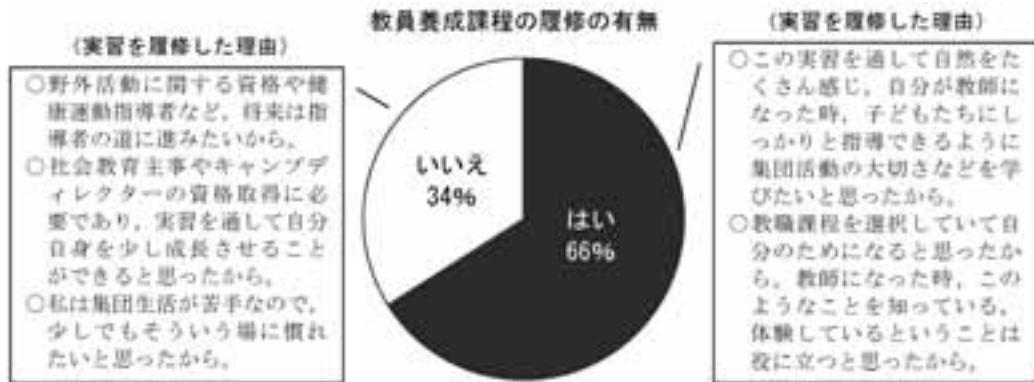


図3 教員養成課程の履修の有無と実習を履修した理由

を履修した理由をみると、教員養成課程を履修している学生は、集団活動の大切さを学びたい、教師になった時に役に立つなど、教員としての資質向上を目的に本実習に参加していることが分かった。一方、教員養成課程を履修していない学生では、健康運動指導士や社会教育主事、キャンプディレクターといった指導者としての資質向上を目的に参加している学生が多く、中には集団生活に慣れるためといった自身の課題を克服するために参加している学生もいることが分かった。

(2) 教育効果の検証

教育効果の検証については、「社会人基礎力の変容」や「実習で学んだこと、気づいたこと」、「実習の経験を生かして実践したこと」のすべての結果を踏まえ、総合的に考察することとする。

① 社会人基礎力の変容

本実習における社会基礎力の変容を明らかにするため、各因子の合計得点の平均及び標準偏差を算出し、一要因分散分析 (sA-Type Design) を行った。その結果は表2に示したとおりである。

分析の結果、測定時期の単純主効果に0.1%水準で有意差が認められた因子は、前に踏み出す力 (アクション) の「実行力」、考え抜く力 (シンキング) の「創造力」、チームで働く力 (チームワーク) の「発信力」と「傾聴力」であった。次に、1%水準で有意差が認められた因子をみると、前に踏み出す力 (アクション) の「主体性」、考え抜く力 (シンキング) の「計画力」、チームで働く力 (チームワーク) の「柔軟性」と「状況把握力」、「規律性」となっており、5%水準で有意差が認められた因子では、前に踏み出す力 (アクション) の「働きかけ力」、考え抜く力 (シンキング) の「課題発見力」となっていた。

そこで、測定時期の単純主効果に有意差が認められた因子に限り、後の分析として多重比較を行った結果 (図4)、事前から事後にかけて有意な向上を見せた因子は、前に踏み出す力 (アクション) の「主体性」と「実行力」、考え抜く力 (シンキング) の「計画力」と「創造力」、チームで働く力 (チームワーク) の「発信力」と「傾聴力」、「状況把握力」となっていた。その

表2 社会人基礎力の平均及び標準偏差と分散分析の結果

社会人基礎力 (N=105)		平均 (標準偏差)			分散分析 (F)	多重比較 (bonferroni)		
		①事前	②事後	③1ヶ月後		① - ②	① - ③	② - ③
前に踏み出す力	主体性	8.7 (1.8)	9.2 (1.9)	9.1 (1.5)	6.39 **	<	<	-
	働きかけ力	11.1 (2.3)	11.5 (2.6)	11.6 (2.4)	3.26 *	-	-	-
	実行力	18.4 (3.3)	19.6 (3.6)	19.0 (3.6)	15.83 ***	<	<	>
考え抜く力	課題発見力	4.4 (1.4)	4.3 (1.6)	4.5 (1.5)	3.46 *	-	-	<
	計画力	10.6 (2.5)	11.3 (2.8)	11.1 (2.3)	4.94 **	<	-	-
	創造力	16.8 (3.7)	17.9 (3.9)	17.7 (3.6)	8.11 ***	<	<	-
チームで働く力	発信力	5.0 (1.1)	5.4 (1.4)	5.3 (1.2)	9.62 ***	<	<	-
	傾聴力	26.6 (3.7)	27.7 (3.3)	27.3 (3.3)	9.74 ***	<	<	-
	柔軟性	6.3 (1.5)	6.5 (1.5)	6.2 (1.6)	4.05 **	-	-	>
	状況把握力	13.8 (2.3)	14.5 (2.8)	14.5 (2.8)	5.79 **	<	<	-
	規律性	13.6 (2.4)	13.9 (2.4)	13.5 (2.8)	4.24 **	-	-	>
	ストレスコントロール力	9.7 (1.8)	9.9 (2.0)	9.8 (2.0)	0.56	-	-	-

***p<.001 **p<.01 *p<.05

うち、「計画力」を除く7因子については、事前と1ヵ月後を比較しても有意な向上が認められた。

② 実習で学んだこと、気づいたことの有無と内容

本実習の具体的な教育効果を把握するため、実習で学んだこと、気づいたことの有無について尋ねたところ、「はい」と回答した参加者は99%となっており、ほぼ全員が本実習で何かしらの学びや気づきがあったことが明らかとなった(図5)。

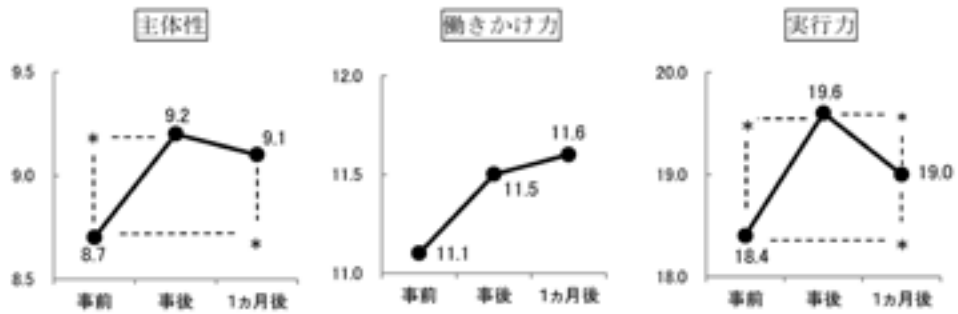
そこで、具体的な内容として、どのような活動でどのような学びや気づきがあったのかについて尋ねたところ、「ASEを通じてよい結果になるのは過程がしっかりとしているからということ学んだ。ゴールすることが大切じゃない。ゴールするために班でどう協力してゴールするかが大切なことだと学んだ。」「仲間と協力して物事をや

り遂げた時の達成感が素晴らしい。登山に自信がなく、登っている時は辛くてやめたいと思ったけど、仲間が支えてくれて前向きな気持ちになれたし、自分自身あきらめたくないという気持ちがあることに気づくことができた。」「食事、片付け、活動などすべてにおいて、コミュニケーションはとても大切であるということ。相手に思っていることを伝えなければ先には進めないし、仲間と意見を共有することでより良いアイデアが生まれる。」といった回答が見られた。

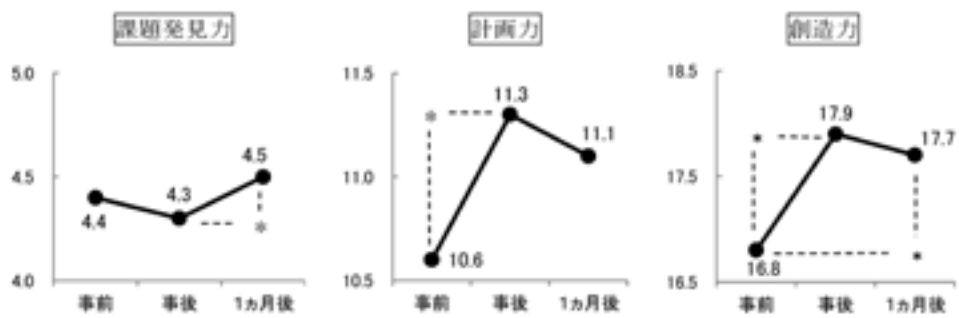
③ 実習の経験を生かして実践したことの有無と内容

本実習における教育効果の日常への般化を把握するため、『野外教育実習』で学んだことを生かして日常生活で何か実践したことの有無について尋ねたところ、「はい」と回答した参加者は72%となっており、参加者の約7割が実習で学んだことを日常生

前に踏み出す力（アクション）



考え抜く力（シンキング）



チームで働く力（チームワーク）

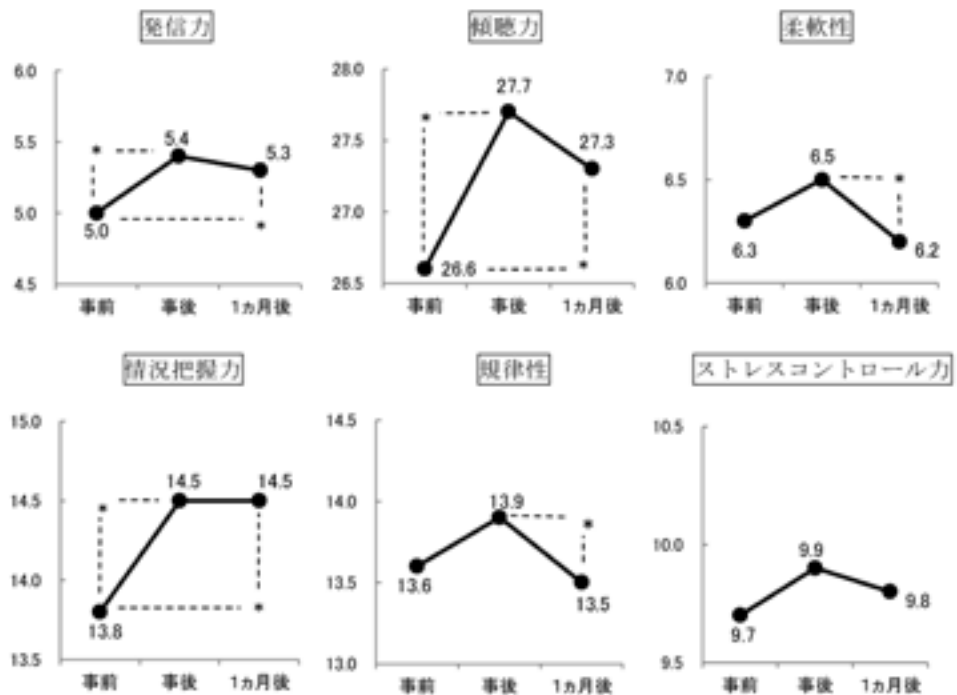


図4 社会人基礎力の変容

実習で学んだこと、気づいたことの有無

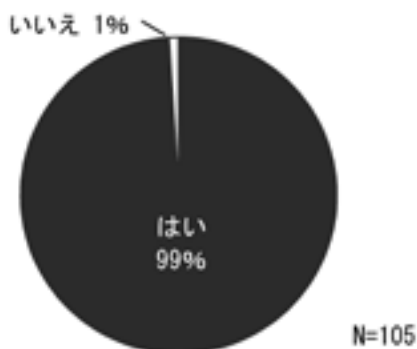


図5 実習で学んだこと、気づいたことの有無と具体的な内容

活で実践していることが明らかとなった(図6)。

そこで、具体的な内容として、どのようなことを日常生活で実践したのかについて尋ねたところ、「実習に行く前は何でも1人で抱え込むタイプでしたが、実習後は友達や周りの人に助けを求めたりするようになり、前よりスムーズな生活を送ることができるようになりました。」「気付かせることの大切さを学んだので、高校生を指導する際は、ふりかえりの時間をあらゆる場面で上手に入れるように工夫しています。」「結果が良ければいいという訳ではなく、過程が大切という事を学んだ。部活でプレーする時に結果だけでなく、過程を気にするようにしたおかげで、技術的にも向上できた気がしている。」「仲間と協力し支えあっていくことの大切さを学んだことで、物事を一人で進めるのではなく、自分ができない事は分担しながら共に活動していくことを心がけるようになりました。」といった回答が見られた。

④ 教育効果に関する考察

実習の経験を生かして実践したことの有無

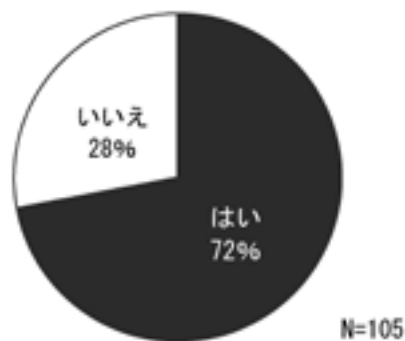


図6 実習の経験を生かして実践したことの有無と具体的な内容

以上の結果より、キャンプ体験は、前に踏み出す力(アクション)の「主体性」と「実行力」、考え抜く力(シンキング)の「計画力」と「創造力」、チームで働く力(チームワーク)の「発信力」と「傾聴力」、「情況把握力」など、社会人基礎力を構成する一部の能力に教育効果があることが明らかとなった。

本実習では、様々な活動を通じて、グループにおける自分の役割を発見する力や使命感、責任感、自ら主体的・積極的に行動する態度や意識を養うとともに、社会性やコミュニケーション能力を育成することをねらいとしていた。キャンプ生活におけるグループ活動では一人ひとりが役割を担い、自分の役割に応じて主体的に行動することが求められる。特に大学生のキャンプでは、小・中学生のキャンプとは異なり、グループカウンセラーや仲間からの指示によって行動するのではなく、今置かれているグループの状況(やるべきことや課題など)を自ら察知し、グループの一員として今何をしなければならないのか、そのため

にはどうすればいいのかということを考え出し、主体的行動することが求められる。また、グループ活動では、グループの運営方針やルール、今後の活動予定などメンバー同士で話し合っ物事を決めたり、情報を共有する場面も多く、その際、自分の考えや意見を他のメンバーにうまく伝えたり、逆に相手の意見をしっかり聴いたりすることが求められる。事後調査で尋ねた「実習で学んだこと、気づいたこと」の結果を見ると、「ゴールすることが大切じゃなく、班でどう協力してゴールするかが大切なことだと学んだ。」、「仲間と協力して物事をやり遂げた時の達成感が素晴らしい。」、「相手に思っていることを伝えなければ先には進めないし、仲間と意見を共有することでより良いアイデアが生まれる。」といった回答がみられた。このことから、ASEや北日高岳登山といった特定の活動だけではなく、キャンプ生活全体を通じてこのような経験を積み重ねたことにより、社会人基礎力が向上したのではないかと考える。

また、キャンプ体験によって向上した社会人基礎力は、「計画力」を除き、1ヵ月後の日常生活においても効果が持続していることが明らかとなった。自分から事を起こす（アクション）、人と何かをする（チームワーク）といったことは日常生活でも生かしやすいことである。1ヵ月後の調査で尋ねた「『野外教育実習』で学んだことを生かして日常生活で何か実践したこと」の結果をみても、「何でも1人で抱え込むタイプだったが、実習後は友達や周りの人に助けを求めるようになった。」、「物事を一人で進めるのではなく、自分ができない事

は分担しながら共に活動していくことを心がけるようになった。」といった回答が見られたことから、キャンプ体験によって向上した社会人基礎力のうち、日常生活でも生かせる能力は向上効果が持続しやすいのではないかと推察される。

V. 結 論

本研究は、社会人基礎力を育成する能動的学習の一つとしてキャンプ体験に着目し、キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果について検証することを目的とした。本研究の結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) キャンプ体験は、前に踏み出す力（アクション）の「主体性」と「実行力」、考え抜く力（シンキング）の「計画力」と「創造力」、チームで働く力（チームワーク）の「発信力」と「傾聴力」、「情況把握力」など社会人基礎力を構成する一部の能力に教育効果がある。
- 2) キャンプ体験によって向上した社会人基礎力のうち、日常生活でも生かせる能力は向上効果が持続しやすい。

以上のように、キャンプ体験による社会人基礎力の向上効果を明らかにすることはできたが、「働きかけ力」や「ストレスコントロール力」といった一部の能力には向上効果が見られなかった。その理由の一つとして筆者は、キャンプ体験における精神的負荷（ストレス強度）が小さかったのではないかと考えている。

本実習のプログラムは、小・中学生を対象とした組織キャンプでも行われるような登山やASE（イニシアティブゲーム）、野外炊事、テント泊といった基礎的なアクティビティで

構成しており、大学生に大きな負荷がかかる冒険的要素の強いアクティビティは実施されなかった。慣れない人にとっては、自然の中での4日間のテント生活は大きな負荷に成り得るが、本実習の参加者は比較的キャンプ経験のある学生が多かったため、テント生活や登山などはあまり大きな負荷にならなかったと推察される。また、班編成は部活動や所属ゼミ、出身校が異なるように配慮していたが、お互いに顔見知りであったり、既に人間関係ができていた班もあったことから、初めて会う人同士の関係に比べると対人関係的にも大きな負荷にはならず、新たな人間関係を作るために自分から積極的に働きかける機会もほとんどなかったのではないかと推察される。築山⁹⁾の研究でもストレス強度の低さや冒険的要素の少なさが、プログラム課題として挙げられていた。

大学教育の一環として行う実習である限り、初めて会う人同士という環境を作ることには極めて難しいが、本研究で教育効果が見えなかった能力の向上を図るためには、沢登りやクライミングなどの冒険的要素の強いアクティビティを取り入れたり、一人で山中にビバークするなど、大学生の特性に応じた精神的負荷の高いアクティビティを導入していく必要があると考える。

大学教育に対する社会人基礎力育成の期待が高まるなか、その育成手段の一つとしてキャンプ体験の有効性を示せたことは意義があったと考えている。今後は、プログラム全体でみるのではなく、こういったアクティビティが社会人基礎力の育成に効果があるのかなど、具体的かつ詳細に検証を重ね、キャンプ体験における社会人基礎力育成プログラム

の構築を目指すことが大切だと考える。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2008) 教育振興基本計画.
- 2) 文部科学省 (2008) 中長期的な大学教育の在り方について (諮問).
- 3) 文部科学省 (2011) 教育指標の国際比較, p10.
- 4) 株式会社アイ・イー・シー (2012/1/22閲覧) 経済産業省経済産業政策局 社会人基礎力に関する研究会 座長 諏訪康弘教授に訊く, <https://www.iec.co.jp/sk1011/002.html>.
- 5) 経済産業省 (2007) 「社会人基礎力」育成のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～.
- 6) 株式会社進研アド (2007) 「社会人基礎力」の育成を通して大学の教育力を向上させる, Between2007年秋号, pp23-26.
- 7) 河合塾 (2007) 社会人基礎力に関する取り組み, Guideline11月号, pp18-21.
- 8) 社団法人日本経済団体連合会 (2011) 産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート調査, pp17-18.
- 9) 築山泰典、神野賢治、田中忠道 (2008) 大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討, 福岡大学スポーツ科学研究第39巻第1号, pp13-26.
- 10) 青少年教育活動研究会 (1999) 子どもの体験活動等に関するアンケート調査報告書 平成10年7月調査, p14.
- 11) 浅井定雄、西川千登世、渋谷昌三 (2009) 社会人基礎力尺度の作成の試み, 日本社会心理学会第50回大会, pp420-421.

- 12) 独立行政法人国立青少年教育振興機構
(2011) 青少年の体験活動等と自立に関する実態調査 平成22年度調査, p147.

付 記

本研究は、「平成22年度北方圏生涯スポーツ研究センター研究費」の助成を受けて実施した。

